

	8-18	1	6	有霧	7	半速	10~11	500	35°	飛揚時動搖ヲ墜落ノ虞アリシニ上昇スルニ從ニ漸次安定 卸ス時漸次降下スルニ從ニ動搖大トナリ50米附近ニ於テ更ニ大トナリ續テ海中ニ墜落ス	
第 二 次	9-15	雲雀	1	擬計附	8	原速	7~7.5	150		7~8	揚時少々動搖上昇後頗ル良好毎時良好 揚卸時稍々動搖上昇後極メテ良好 卸ス時縦骨一本折ル
	〃	〃	2	擬計附	〃	〃	〃	600	38°	〃	向ッテ右ニ傾斜 數回旋回頗ル不良
	〃	秋田呂 (能持呂)	3	擬計附	〃	〃	〃	300		9-10	頗ル良好
	〃	千鳥	4	擬計附	〃	〃	〃	〃	45°	5-7	揚時少々動搖セルニ上昇後及卸時共頗ル良好
	〃	〃	5	擬計附	〃	〃	〃	200	43°	3-5	

別表第二
使用セル風寸法及計器取付位置

1068

114

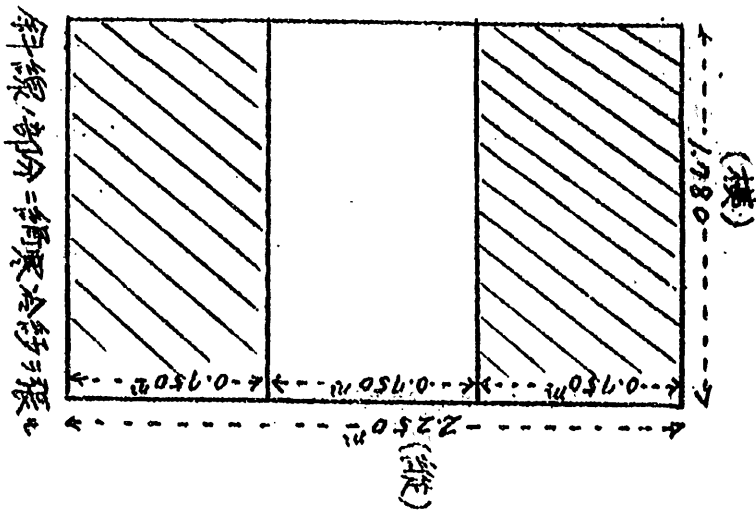
番 號	製作寸法			吊 糸 寸 法				計 器 取 付 位 置		
	総 長	横 中	中	中央部 糸用減り	右側部 糸用減り	左側部 糸用減り	中央部 糸用減り	計器重量	上 方	前 方
1	2.220	1.765	600	3.200	270	270	200	1.780	97	150
2	2.250	1.780	600	3.150	270	270	250	1.680	105	140
雲 雀	2.250	1.780	600	3.220	270	270	250	(擬)	105	123
試 製	2.250	1.800	620	2.600	280	280	250	/	/	/
干 鳥	2.250	1.790	620	2.670	270	270	260	(擬)	125	127

註 糸目絞点及計器取付位置、別表第一参照

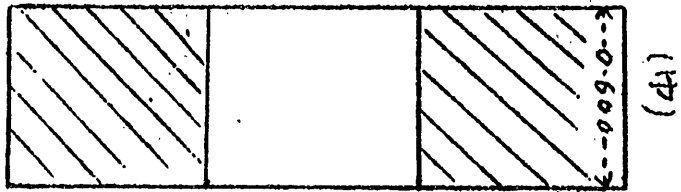
備考

(一) 製作寸法 (原案)

前面



側面



要目

- 一 面積 五.三平方米
- 一 重量 三.二吨
- 一 討算重量 一.四五吨
乃至一.七八吨
- 一 揚線 (鋼)
- 一 吊糸長 0.7m --- 320^g/_{100m} --- 80kg
- 一 中央上部 三.二米

(5) 音響測深ニ就イテ

今次行動ニ際シテハ霧中航行中音響測深儀ノ使用頻繁ナルベキヲ予
想シテ従来ノ音測班ニ名ヲ三名ニ増員シ極力之ガ訓練ヲ施行シ其ノ能
率發揮ニ努メ音測ニ對スル信頼度ヲ高メ良好ナル成績ヲ收メタリ
測量行動中ニ於テハ毎時或ハ毎二時間毎及各探水何所ニ於テ音測
ヲ行ヒタル結果北太平洋北西部及「ベリリング」海々底状況ニ就キテ相
當程度迄之ヲ明ラカニスルヲ得タリ、別番第十六水艦音測ノ結果
ト従来ノ音載水深トヲ參照シテ描キタル北太平洋北西部等深線
圖ナリ（但シ本艦音測ノ分ハ指標回転速度及水温ニ對スル更正ヲ
施シアラズ）

第五 航海ニ關スル事項

一 航泊日数及航程等

	荷(青普壽)	七	月	八	月	荷(青普見時迄)	合	計
航海日数	七日六時五分	三日二時五分	六日十時五分	九日一時五分	七日九時五分			
碇泊日数	五日七時五分	八日七時五分	十二日五時一分	五日七時八分	四日七時八分			
航走距離	四一六三三	五〇二九一	三九八二〇	三八七五八	一七〇五〇			

三〇

二 所感並所見

(一) 霧中艦位ニ就テ

本艦行動中於ケル天測施行状況ハ別番第二乃至六〇ニ示ス
 洋中ニ於テハ海潮流ノ影響少ナク推測位置ニ依リテ大差ナク如クナルモ
 干島列島附近アリユーション群島附近ニ於テハ海水ノ流レ複雑ニシテ晴
 戒偵察等行フ場合於テ推測位置以上ノ精確サヲ要求スル場合
 天測ノミテハ艦位決定ニ不充分ヲ感ズルコトアルベシ、斯クノ如キ場合ニ

於テ前述等深線圖(別圖第十)或ハ後ニ述ベントスル霧中航行
用圖ノ如キモノノ刊行セラル、ヲ要スト認ム

(2) 位置記入用圖ハ全行動ヲ通ジ有効ニ使用サレタリ

本圖ハ緯度五十二度五十分以下ノモノニナルモ艦船ノ行動範圍增大
ニシテ少クモ緯度六十度位迄(現行以外ニハ紙幅ヲ縦刷トスルモ可)

刊行サル、トキハ便益更ニ大ナルモノト認ム

(3) 海圖三五〇ニトニセハトノ中間ハ經度約二度位ノ開キアリ三五〇ニヨリ
直チニ八セニ移ルヲ得ズ而モ八〇四ハ余リニ小尺度ナリ

三五〇ニハ幾分尺度ヲ縮ムルモ可ナリ之ヲ接續スル如クスルカ、或ハカ
ムチマツカ東岸ヨリモ少クモアツツ島位迄ヲ含ム海圖刊行ハ將來ニ對

シテ極メテ必要ニシテ船舶ノ便益モ亦大ナルベト思考ス

(4) 千島列島附近ニ於テハ沿岸至近ノ距離ノ外測量不充分ニシテ全
方面海圖ハ載水深極メテ少ナク霧中航行ヲ行フ艦船ニ對シテ效果

多カラズ 將來全方面ノ洋中ニ亘ル測量ヲ完成シ霧中航行用箇ノ如
キモノノ作製セラルル事ヲ希望ス

三二

該箇ノ主眼トスル所ハ單ニ艦ノ保安ヲ完フスルニ止マラズ之ニヨリテ
艦位ヲ求メ得テ以テ戰略戰術ノ要求ニ應ジ得ルヤリ、從來ノ海
高ニ於ケル箇載水深採用ノ標準ハ一區域ニ於ケル最淺ノモノヲ以テシアルモ
之ヲ變更シ箇版許容範圍内ニ於テ可及的ナク水深ヲ記入シ(少ク
モ最淺最深ハ之ヲ記入ス)ニ百米界線附近ヲ密測シ之ガ中斷箇所無
キヲ要ス 蓋シ霧中航行ニ於テハ予想水深ヨリ淺キモノヲ得タル場合警戒
スルハ勿論ナルモ過大ノ水深ヲ得ルトキモ亦「迷ヒ」ノ因トナリ誤判断ニ道ヲ
ノ虞アルハナリ

- (5) 本艦今次出動以前新設セル保式艦底測程儀ハ全期間ヲ通ジテ
作動良好ニシテ大洋航行中極メテ有効ナルコトヲ示セリ
- (6) 音響測深儀ハ全期間ヲ通ジテ最モ有効ニ使用サレ艦ノ保安上

必要不可欠ノモノタルコトヲ証セリ。將來當方面行動艦船ハ艦ノ大小ニ拘ラズ必ズ之ヲ裝備スルヲ要スルモノト認ム

(7) 無線方位ニ依リテ艦位ヲ得ル之亦霧中航行ニ於テ屢々必要トスル所ニシテ本艦今次行動中ノ經驗ニ依ルモ相當ノ信賴ヲ置クニ足ルモノナリ。本艦ニ於テハ方向測定機ハ未ダ之ヲ裝備セラレザルモ霧中航行船舶ハ將來該機ヲ裝備スルヲ要ス

三 無線羅針局ト交信經過概要(幸シク航海要領ニ關係ス此ノ欄ニ入レタリ)

(1) 計画及經過概要並所見

(イ) 叢ニ燈台局ヨリノ信賴モアリ且本艦今次行動中ハ濃霧期ニ當ル關係上陸上羅針局ト交信方位測定ヲ實施セリ

(ロ) 交信並ニ方位測定ノ實施期目關シテハ行動上確定シ得ザリシヲ以テ之ガ終始ハ本艦ノ全方面航行ノ都度適宜決定スルコトヲ要領

等細目ハ無線羅針局業務試験執行要領ニ依ル

三四

(一) 測定成績並ニ通信記録示ス誤差及距離ハ本艦行動後ノ結果ヨリ艦位ヲ推定セルモノヨリ出シタルヲ以テ多少ノ誤差ハ免レ得ザル處ナレ

共航海ノ見地ヨリ多少トモ参考トナルベキモノト認ムラル

(二) 羅針局ノ航海ノ利用價値ハ充分ニシテ本艦今回ノ行動ニ於テ多大ノ

便益ヲ得タル所ナルモ本艦ノ如ク方位測定機ヲ装備セズ單ニ羅針局ニ

頼ルニミテハ之ガ利用範圍ハ局部ニ過ズ從ツテ之ガ利用價値ニ限

定セラレノミナラズ右範圍外ニマリテ濃霧等ノ場合艦位ノ決定ハ他

ニ方法無キヲ以テ隨所羅針局又ハ標識ヲ利用シテ隨時方位ヲ決定

且廣範圍ニ使用シテ之ガ價値ヲ増大セシムル為方位測定機ヲ搭載

スル事ハ極メテ所要ナリト信ズ

又斯クシテ相互ニ測定ヲ行フ時一層迅速且的確ナル精度ヲ保持シ

得ルモノト認ム

(2) 無線羅針局業務試験執行要領

(1) 名称(位置)無線呼出符號及種類

襟裳岬 (北緯四十五度五分三〇秒 東經一四四度四分五〇秒) JLM 試驗

惠山岬 (北緯四十一度一分一四秒 東經一四四度四分四秒) JLF 實施

尻矢崎 (北緯四十一度五分四四秒 東經一四四度四分四秒) JLD 全右

大間崎 (北緯四十一度三分一〇秒 東經一四四度四分五〇秒) JLG 全右

(4) 發射電波性質及發振周波數(波長)

各局共可聽持續電波 三七五キロサイクル(八百米)

(3) 聽守周波數(波長)

各局共可聽電波 五〇〇キロサイクル(六百米)

(2) 裝置方式

各局共真空管式

(1) 空中線電力

標 裳 岬						羅針局名
一〇四八	〇七〇一	〇四五〇	〇四二五	〇三四五	〇三四三	測定期時分 七月十一日
二六〇	二四四	二三七	二三一	二一九	二二五	測定方位(度)
二五八〇	二四九〇	二三五〇	二三〇五	二一九〇	二一八五	実方位(度)
八六五	五九〇	二八七	二六〇	二〇五	二〇二	距離(哩)
+2	-5	+2	+5	±0	-3.5	誤差
参考点通報ニ束ル	フラット為参考点ト	推定位置	フラット		フラット	記 事

3) 無線羅針局方位測定成績

無線方位測定規則ニ準ズ(以下省略)

(1) 同交信方法

各局共無休

(2) 試験執行時間

各局共 三五〇ワット

埧矢尻				岬山恵				岬裳襟				
一〇四七	〇九四二	〇八四五	〇七五六 七月十日	〇七二五	〇六四一 九月三日	一〇五六	〇九三九	〇八四九	〇七五〇 七月十日	〇二〇八	〇一三三	〇一〇三 七月十九日
三四六	〇三三	〇五七	〇七一	一二六	一〇八	一四六	一三七	一一八	一〇八	二二四	二三八	二三六
三三九五	〇三七〇	〇五九五	〇六七五	一二一五	一一二五	一五一五	一二四〇	一一六〇	一〇八五	二四三五	二三八五	二三七〇
九五	一一七	一八八	二七五	一三四	一七八	一五三	三五七	三〇〇	三九五	一七八	二二二	二六〇
+6.5	-5	-2.5	+3.5	+4.5	-4.5	-5.5	+3	+2	-5	-2.5	-5	-1
	同右	三回送信セルニ對シ「フラット」 方位疑ニ後判判定要求アリト		フラット	フラット						フラット	

三七

岬 裳 襟							羅針局	
日	時	距離	誤差	交	信	状	況	
七月十日	〇三三四	二〇二	-3.5	<p>第一回(七月十日)ハ規定ニ依リ五〇〇Kc(可聴持続電波以下何レモ可聴)ヲ發シテ〇二〇四ヨリ呼出シタルニ間モナラズ應答アリシモ後感ナリ應答ニ終リ後數回呼出ヲ行ヒ〇三回對テ應答ヲ得テ五〇〇Kc(持続電波以下何レモ可聴)ヲ發シテ送信ス以後連絡良好ニシテ數度三回リナリ位測是交信ヲナス途中フットノ為送信ヲ反覆セル場合モアリシカ概テ一回送信ヲ可ナリ〇七〇二距離モ相當大ナルル為一旦中止セル所〇四八本狀對尻矢崎送信ヲ測定シ参考ヲテニ通報シ来ル依リ更ニ交信ヲ以テ第一回ヲ終アス</p> <p>第二回(七月十九日)モ前回ト全要領ナルモ概テ今回ハ初ヨリ三七五Kcノミテ連絡ヲ取ル終始連絡良好ナリ〇五二〇連絡ヲ止ム</p>			空間狀況	
七月十日	〇三四五	二〇五	±0				空ニ三混アリ	
七月十日	〇四二五	二六〇	+5				全	右
七月十日	〇四五〇	二六七	+2				全	右
七月十日	〇七〇一	五九〇	-5				空ニ混アリ	
七月十日	一〇四八	八六五	+2				全	右
七月十九日	〇一〇三	三六〇	-1				空ニ混アリ	
七月十九日	〇一三三	三三二	-5				全	右

(4) 無線羅針局トノ交信記録

尻矢崎	大間崎
〇九七四	〇七四四
三二	〇七六
三四二	〇八二五
三四九〇	一九〇
一六二	-6.5
-7	

三八

大	尻 矢 崎					山 惠					標 嶺	
	七月十一日 一〇二	九月三日 〇七四四	一〇四七	〇九四二	〇八四五	七月十一日 〇七五六	〇七二五	九月三日 〇六四一	一〇五六	〇九三九	〇八四九	七月十一日 〇七五〇
一九〇	一六三	九五	一一七	一八八	三七五	一三四	一七八	一五三	三五七	三〇〇	三九五	一七八
-6.5	-7	+6.5	-5	-2.5	+3.5	+4.5	-4.5	-5.5	+3	+2	-5	-2.5
<p>第三回(七月十一日)初ノ試験的ニ三七五KCヲ以テ呼出セル直チニ應答アリ業務ヲ開始ス依ツテ次回以後ハ三七五KCノミヲ以テ連絡ス惠山ノ應答ハ迅速ニテ連絡ハ極メテ良好ナリ二〇〇中止</p> <p>第二回(九月三日)初メ五〇〇KCニテ呼出セル間モナク應答アリ以後ハ三七五KCニテ終始連絡良好ナリ且尻矢側ノ感ナキ為交信不能ナル際ス尻矢ノ注意ヲ喚起スル等交信極メテ円滑ニ行ハレタリ</p> <p>〇七三〇連絡ヲ止ム</p> <p>第一回(七月十一日)最初五〇〇KCニテ呼出し對手應答ヲ得テ三七五KCニテ連絡ス第一回(七月十一日)ノ連絡ハ概シテ良好ナルモフラット故以テ再送信セルコト屢アリ一〇五〇連絡ヲ止ム</p> <p>第二回(九月三日)ハ〇六〇〇ヨリ教回呼出セルモ應答ナク惠山岬ヨリ聞き兼ネテ指呼セルモ應答ナシ</p> <p>〇七四〇ニ至リテ漸ク應答アリタルニ付測定ヲ依頼ス連絡良好ナリシモ間々ナク連絡ヲ止ム(〇七四五)</p>												
第三回(七月十一日)最初五〇〇KCニテ呼出ス直チニ應答アリ三七五KCニテ送信ス連絡良好ナリニテ一回交信セルノミ	空ニ混アリ	空ニ混多シ	全右	全右	全右	空ニ混アリ	全右	空ニ混多シ	全右	全右	空ニ混アリ	空ニ混ナシ

三九

間		九月三日	二〇五連絡止ム
崎		〇七四四	
〇七四九			第三回(九月三日)アリキ此ノ両回五〇〇に及此ノ間 三七五にニラ呼出スモ應答ナシ
合	右	空ニシ濕多シ	四〇

四霧中聽音器試作ニ関スル事項

本艦行動中別番第十^{AB}如キ霧中聽音器ヲ試作セリ実験ノ
 機會^{ナカリシモ}霧中航行艦船ニ斯ク如キ方式ノモノ裝備セバ有
 効ナリト思考ス

第六 運用ニ関スル事項

一 出勤前ニ於ケル物品積載状況ニ就テ

(1) 本艦燃料需品等ノ搭載ニ就テ

燃料ハ各庫量満載ノ外第一種塊炭以入、モ、上甲板後部ニ〇噸

上甲板前部ニ〇噸ヲ搭載セリ

貸其品中防寒衣服類ハ之ハ運用料帆布庫等ニ便宜分載

其他ハ各當該倉庫内ニ積載四乃至五ヶ月分ヲ準備セリ

(2) 托送器材ノ積載状況

上甲板後部 ↓ 揮發油外一件 六五匁 二四匁

圧搾機室 ↓ 荷車外十三件 一三四匁 五八五匁

上甲板中部 ↓ 板外二件 二八匁 二一匁

冷却機室 ↓ 砂外三件 九〇匁 三九匁

(3) 吃水増加

本艦基準状態ニ於ケル平均吃水三米八六ニ對シ横須賀出港時ニ

於ケル平均吃水ハ四米八〇ツリム〇米四〇ニシテ

Tons per inch

Immersions 十一噸ハトシテ基準状態ニ比シ約四百三十七噸ニ積載セリ

二. 船体兵器保存手入ノ概要

一. 船体

航海中ニ於テ殆ド終始濃霧ノ為露天甲板以上ノ保存手入出
来ズ之ガ為帆布具及索具等ノ腐蝕甚シク機ヲ得次第之ガ保

存法ニ努メタリ 露天甲板以下ノ部ニ於テモ航海日数多ク手不足ナ

ル上天候不良ナル為予定通り保存手入ハ行ヒザリシモ海上平穩

ナル日ニ内舷ノ鏽落短艇及各科倉庫等ノ保存整備ヲ施行セリ、

炭水補給ノ為、僅少ナル碇泊期間ハ主トシテ外舷手入ニ充テ六月

下旬外舷總油拭九月下旬外舷總塗粧ヲ施行セリ

二. 兵器

- (イ) 露天砲ハ風濤アル場合海水ヲ被ルコト夥シキ故砲覆ヲ二重或ハ三重トシ濃霧襲来時ハ一週間ヨリ長キハ十日ニ亘リ武器平入不可能ナル事アリシヲ以テ常ニ砲口栓ヲ挿シ砲鞍砲架砲身中發鏢ノ虞アル部分ニハ「グリーン」ヲ塗附シ以テ海水ノ浸入ヲ防止セリ
- 天氣晴朗ナル日ハ充分ノ時間ヲ以テ射撃後ノ如ク念入りニ武器平入ヲ行ヒ再ビ前述ノ方法ヲ講ジ斯レテ完全ニ保存平入ノ実ヲ舉ケルヲ得タリ、
- (ロ) 捕用品、小銃、拳銃等ノ如キ月一回乃至二月ニ三回普通分解平入ヲ施行シ充分油ヲ塗布シ置クコトニ依リテ良好ナル成績ヲ得テゲ得タリ
- (ハ) 彈藥庫ハ昭和七年改装以來濕度常ニ78乃至80ノ間ニテリテ時ニ85ヲ越スルコトアリ 今回ノ行動ニ際シ濃霧連日ニ亘ルヲ豫期シ出港前濕氣少ナキ日ヲ選ビテ充分換氣ヲ行ヒ給排氣弁ヲ閉

×出港セリル後寄港地ニ於テ天氣晴朗ナル日ヲ選ビ換氣ヲ行ヒ
 タル所庫内濕度ハ常ニ80以下アリ為ニ藥莢外部ノ青銹モ昨年
 度ニ比シ極メテ僅少ニテ彈藥保存上非常ニ好結果ヲ收メタリ

四

第七 通信ニ関スル事項

ノ通信状況

(1) 長波長通信可能區域ニ就テ

第一回行動中ハ終始長波ヲ使用シテ通信セル所其ノ最北端
 北緯五十一度東經百五十六度附近ニ於テ大湊宗谷共ニ感五大
 湊ニ於ケル本艦ノ感度ハ北緯四十五度三十分東經百五十一度附近ニ
 ハ晝夜共感四乃至五アリテ連絡確實之ヨリ以上北緯五十一度東
 經百五十六度ニ至ル間ニ在リテハ夜間ハ感四乃至五ニシテ良態ナルモ

(薄暮ノ頃ヨリ漸々感度ヲ増大ス)晝間ハ黎明時ヨリ稍急激ニ
 感度低下シ日中ニ於テハ全然不感事稀ナラズ此ノ間ニ在リテモ時
 々突發的ニ感五アルコトアリ同一地ニ在リテモ此ノ現象アルハ艦首方位
 ノ変化又ハ氣象ノ影響ナラント推測スルモ詳細ハ今後ノ研究
 ニ俟ツノ他ナシ
 オホツク海ニ於ケル交信状態ハ極メテ良好ニシテ「ロバトカ」沖ヨリノ
 本艦ノ送信ニ對シ泉谷ニ於ケル感度晝夜共四乃至五ニシテ表干島
 ニ於ケル大湊トノ交信ニ比シ遙カニ容易良好ナル連絡ヲ保テ得
 干島東方海面太平洋ニ於テハ本艦第三回行動中北緯四十五度
 東經百六十三度三十分附近迄ハ本艦ニ於ケル大湊ノ感度ハ晝夜共
 概ネ三乃至五頻調ニ交信シ得タリシモ之ヨリ以遠ノ地ニ於テハ晝間
 連絡漸次困難トナリ北緯四十五度東經百六十五度以上ニ於テハ殆
 ニ不可能 夜間記録トシテハ北緯四十五度東經百六十六度三十分於
 程

ラ感五ノ場合アリシモ暴風雨ノ為空電強烈トナリ一時大湊ノ感アルモ
 受信不能本艦側長短波共大湊ニ於テ不感トナリシ事アリ其
 後北緯五十度東經百七十七度附近ニ於テ本艦短波ノ感アリル後
 短波ニヨル連絡ハ行ヒ得ルモ長波通信ニ於テハ東經百七十度以
 遠ハ本艦ノ現状ニ於テハ通信困難ナリトスルヲ得ベシ

(ロ) 通信ニ関スル大湊トノ協定事項

第三回行動終了後大湊入港ニ際シ本艦第三回行動以後ノ通
 信方法トシテ左記事項ヲ協定ス

a 使用電波

大 湊

本 艦

第一常用短波

八四〇 K.C (晝間用)

二六〇〇 K.C (昼間用)

第二常用短波

四〇四 K.C (夜間用)

六四八〇 K.C (夜間用)

第三常用短波

三三〇〇 K.C

八三八〇 K.C

註 第三常用短波ハ第一第二電波ニ對スル予備トス

長電波差換時間

晝夜間、電波差換時刻ヲ〇七〇〇及一九〇〇トス

〇 交信時間及交通法

交信時間ハ每奇數時 但シ近距離ニテハ先長波ニテ規定通信ヲ行
ヒ隔遠スルニ隨ヒ短波交信ニ移リ外國領域附近電波輻射ヲ不
利トスル區域ニ至ラバ本艦ノ時機指示ニ依リ協定連絡(待受)トス
待受中ハ相互ニ待受ノミヲ行ヒ電アル場合ハ特ニ交信ス
協定時刻尤ノ如シ

〇四三〇—〇五〇〇 待受

一〇三〇—一二〇〇 全右

一三〇〇 連絡

一九〇〇—一九三〇 待受

二三〇〇 連絡

(時刻、真九時刻帯時ニ依ル)

右以外ハ海軍無線通信規程ノ定ムル所ニ據ル

ハ短波長通達區域並ニ之カ撰擇上ノ注意

26480 KC ↓ 北緯四十八度以南東經百六十三度以西ニテハ晝夜間共

殆ト同一状態ニテ晝間用電波トシテモ使用シ得 右以遠ノ地域ニ

於テハ夜間波トシテノニ適當ナル特性アルヲ著シテ發揮シ晝間ハ

殆ト不感ナリ 本電波ハ最遠地域北緯五十六度西經百七十三度

附近ニ於テモ大湊ニ於テ感五アリ 夜間波トシテ各方面使用上最

適ト認ム

28280 KC 北緯四十七度三十分東經百五十八度三十分ヨリ北緯

四十五度東經百四十八度三十分間ニ於テハ晝夜共同程度ニシテ兩用ノ

可能性アリ 本艦第四回行動中ノ經驗ヨシバ北緯五十三度三十分

東經百六十七度遠感四アリシモノレ以上北緯五十四度三十分東經百七十

度迄、間及北緯五十六度東經百六十五度ヨリ北緯五十五度東經百
五十九度迄ノ間ニ於テハ晝間本電波ノ感ナシ

八四八〇Kcヲ使用スル大湊電信所ノ談ヲ聞クニ、大湊送信ノ八四八〇Kc
ハ南千島附近特ニ北緯四十四度東經百四十七度附近ヨリ大湊ヘ到
ル線ニ於テハ不感ナリト此ノ現象ハ本艦ニ於テモ今次行動中屢々
經驗セリ

〇二三八〇Kc 第三回行動ニ於テ晝間波トシテ使用セル成績ニ據レバ
北緯五十度東經百六十九度迄ハ略感四乃至五ナルモ薄暮以後夜
間ニ於テ感度良好黎明時以後感度不良トナリ日中ニ於テハ前
記範圍内ニ於テモ時々不感ノ事アリ

以上ノ成績並ニ屢次ノ經驗ニ徴スルニ六四八〇Kcハ各方面共ニ良好ニ
シテ夜間波トシテ最適ナルモ晝間波タルハ二八〇Kcハ「アリユーシヤン」群
島至勘察加東岸方面ニ適シ一三八〇Kcハ「アリユーシヤン」群島全

四九

東方海面ニ於テ比較的良好ナルガ如シ何トスルモ通達距離ノ夜間
 波ニ比シテ遜色アルハ免レザル所ニシテ晝間ニ於ケル空界諸種ノ影響
 ヲ突破シテ尚通達率ヲ増大セシメンガ為ニ送信勢力ノ増大ヲ要ス
 (二) 氣象電報受信状況

本艦行動中ハ終始中央、海洋、大泊、三箇所ノ実況報、警報ヲ
 受信セルモ特ニ空電ノ妨害ナキ限り中央、大泊氣象ハ全行動範圍
 内ニ於テ受信可能海洋氣象ニテリテハ北緯五十度東經百五十六度
 以北以東ニ於テハ受信不可能ナリ

(2) 送信機ニ就テ

本艦現用送信機ハ長波用トシテ一ニ式三號送信機(三吉)短波用
 トシテY下式特五號送信機(三五ワット)ナリ、長波使用範圍外ニ於
 テ短波ニ特ニ得ルヲ以テ長波送信機ハ現裝備ノモノニテ可ナルモ短波
 送信機ハ現裝備位置ノ關係上如何ニスルモ多少ノ震調ヲ免レズ

且前記通信状況ニ於テ明ラカナル如ク夜間波ニ比シテ晝間波ノ著シク通達率ノ小ナルハ幾分ノ衰調アルト断定セザララ得ズ

今次行動中本艦送信機ノ状態ハ頗ル良好ナリシガ現在以上ニ通達距離ヲ増大シ通信ノ確實性ヲ有セシムルハ最モ必要ナルコトニシテ之カ為ニ適當ナル電波ノ選擇時間的空間状態ノ調査等ニ俟ツ所大ナルモ尚艦型小ニシテ現在以上輻射勢カヲ増大シ得ザル本艦ニ於テハ電氣勢カノ増大即チ送信機力量ノ増大ノ他途ナシ而シテ裝備位置等ヨリ考察シテ一吉附近ノモノヲ最良ト認ム

(3) 受信機ニ就テ

現用受信機ハ長波受信器トシテ多重及一四式一號受信機短波用トシテ一五式一號八九型受信機ニシテ前者ハ四式ナル上ニ電波ノ選擇性ニ乏シク能率モ他種ノモノニ比シテ多大ノ遜色アリ 本行動中ニ於テモ例ハハ氣象電報ヨリ優劣ナル受信機ヲ有スレバ海洋氣象

如キモ全行動範圍ニ於テ受信シ得ルニ非ズヤト思ハルノ点アリ
 將來ニ於テハ通信量ノ多少ニ拘ラズ遠距離通信ヲ必要トスル如キ
 行動任務ニテハ船舶ニ相當優秀ナル受信機ヲ配給裝備スルノ
 要アリト認ム

(4) 方向測定機

近來北洲沿岸其他濃霧アル地方ニ於テハ無線方位測定所
 或ハ無線標識局ノ設ケラルアリ之カ利用ハ全方面行動ノ船舶ニ
 對シテ多大ノ便益ヲ興フルモノナリ 今後全方面行動ノ船舶ハ是非
 共之ガ裝備ヲ必要ナリト認ム

(5) 其他

本艦ノ如ク長期間ニ亘リテ所屬軍港ニ返投スルコトナリシテ行動
 スル艦船ニ在リテハ艦内修理不可能ナル計器類等ハ適當ノ豫備
 器ヲ裝 ンルヲ要ス 例ハ本艦現有短波測波器、電流計式

ニシテ一度故障ニ際會スルハ艦内修理不可能ナリ 今回不測モ本器
 ノ故障ニ際會シ俾ヒモ演習中ノ本會ノ測波器ヲ基準トシテ本
 艦ノモハ照明式ニ変更シ辛ウジテ使用シ得タルモ斯クノ如ク微妙
 ナル精度ヲ必要トスル基準器ヲ姑息的手段ヲ以テ艦内修理ヲ施
 スカ如キハ電波ノ精度保持上遺憾ナルノミナラズ不都合ナルヲ以テ今
 回ノ如キ長期行動セントスル 艦船ニテハ必ず他ニ代ルベキ豫備器ヲ
 準備スルヲ要ス。

第八 機関ニ関スル事項

機関科
 主機械

本艦主機械ハ去ル昭和七年十月池貝式無氣噴油「アイセル」機械

五三

(六〇〇馬力)ニ改装セラレ今年十月ヨリ測量艦トシテ就役爾来引續
 キ主トシテ海洋測量ニ從事中昨年秋頃ヨリ入籠並ニ吸罅擦傷
 シ状態不良トナリ本年五月ニ至リ横工廠ニ於テ徹底的ニ故障原
 因ヲ調査ノ結果工作上不良ノ何所發見該部ヲ修理完成シ予
 備品トシテ入籠ニ何吸罅ニ何給入弁五本宮川式接手發條
 十何ヲ借用搭載ノ上今期海洋測量ニ從事去ル五月三日横須賀
 出港以來主機械使用時教一七四三・一七時間總航程一七、〇〇哩
 ニ達スルモ主機械ノ状態極メテ良好ニシテ前回續出セルカ如キ故
 障ニ對スル憂ナク全行動ヲ通ジテ僅カニ宮川式接手發條一何
 切損左舷推力軸承潤滑油冷却水管ノ腐蝕穿孔ノ二件ニシテ
 起動頻繁ナル測量艦ノ主機械トシテ信賴性充分ナルモノト認ム

主機械使用時教

右舷 原速一六五・〇三 半速八五・四八

微速三五・三三

左舷 原速 一五八二一四 半速 八五〇〇 微速 三五〇九

起動回数

右舷 五六五

左舷 六一七

造水装置

今期行動中の真水補給地ニ便ヲ得且ツ氣候ノ關係上真水不足ヲ感セザリシガ次期南洋方面測量作業從事ノ準備トシテ數回ニ亘リ採水試験ヲ施行セルニ其ノ結果ハ良好ナラザリシモ目下横須賀工廠ニテ修理施行中ナルハ次期行動ニ使用可能ト認ム

鐘

一般ニ良好態ナリ

電氣

一般ニ良態ナリ

冷却機械

昭和七年工月複効炭酸瓦斯式冷却機械ニ改装以來頗良好ナルモ現在、瓦斯補給入口、瓦斯圧力、高壓第一調整弁筐ニ連テラ以テ補給瓦斯圧力が冷却器、瓦斯ト同圧力ニ至レバ補給不可能ニシテ瓦斯容器、残瓦斯ハ使用出来ザルノ現状ナリ。依テ、炭酸瓦斯補給入口ヲ圧搾管下部蒸發器、瓦斯戻管入口ト同一箇所ニ取付改造セバ容器内、炭酸瓦斯ハ全部補給シ得ルモノニシテ一層有効ナリトス。

雑用蒸氣管上甲板ヨリ冷却機械室へ新設

冷却器用炭酸瓦斯補給の際ハ「フローランプ」ヲ使用スルモ冷却
 機械室ハ后部ハ重油「タンク」前部ハ火薬庫ニシテ火氣使用危
 険ニ付現在ハ上甲板ヲ洗濯桶ヲ以テ湯ヲ沸シ使用スル状態ニ
 シテ航海中艦ノ動搖ノ際ハ頗ル困難ニ付上甲板食器消毒用雜
 用蒸氣管ヨリ冷却機械室マデ外徑ニ分ノ吋銅管ヲ導キ之ヲ
 以テ炭酸瓦斯加熱用並ニ塩化カルシウム溶解用ニ充ツルヲ便
 利トス

舵取機械

一般ニ良態ナリ

揚錨機械

一般ニ良態ナリ

揚艇機械

一般ニ良態ナリ

空氣圧搾唧筒

「ダイゼル」發電機連結ノモノハ極メテ良態ニシテ常ニ使用スルモ蒸氣ヲ使用スルモノニ在リテハ年力量不足ノ為殆ド使用セズ

第一内火艇機械

本機械ハ大正十年二月池貝鉄工所ニテ製作セシモノニシテ永年使用ノ結果各部衰朽甚シク故障頻發シ長期間邊境ニ行動スル艦ノ使用ニ適セズ特ニ本艦今次北洋方面ノ氣象海洋測量任務ニ從事中該期間ハ恰モ濃霧ノ最盛期ニシテ斯ル信賴性ナキ機關ヲ有スル汽動艇ヲ遠リ艦外ニ派遣スルハ極メテ危險ヲ感ジ殊ニ現在

ノ機械ハ二箇十馬力ヲ船体ニ比シ力量過少ニ付四箇二十馬力機械ト
 換装スルヲ要ス

今次行動中ハ特ニ凡記諸項ニ注意使用セシ所幸ヒミテ何等故障

ナキヲ得タリ

(イ) 取扱者養成ニ関シテハ故障ノ都度研究教育セリ

(ロ) 特ニ弁ノ開閉時期及點火時期ノ調整水冷却装置溫度ノ調

整ニ注意セリ

(ハ) 潤滑油ハ努メテ一定量ニ保ツト同時ニ潤滑油ノ濃度ヲ按配セリ

(ニ) 揮發器

混合氣加減弁(蝶弁)開閉不確實ニ付混合室内壁ニ密

着セシムル様改造セリ

(ホ) 保溫装置

寒冷地方ニ於テハ氣化作用完全ニ行ハザルニ付「ガソリン」ノ氣化状態ヲ良好ナサシムルタメ且ツ完全ナル混合氣ヲ得ル目的ヲ以テ排氣管ノ周圍ニ鉄板ヲ以テ覆テ作り排氣瓦斯ノ熱ヲ利用シ混合氣ヲ適當ナラシムル特殊装置ニ改造シ混合氣ヲ良好ナラシメタリ

(ハ) 高圧點火装置

高圧磁石發電機ハ濃霧ノタメ常ニ濕氣ヲ含ミ絶縁不良トナルコトアリ航海中(汽動艇ニ帆布ノ覆アルモ海水ヲ被リ濕氣ヲ含ムヲ以テ)使用セザル期間ハ取外シ使用ノ都度「ゴム」覆ヲ以テ之ヲ固ク使用セルニ何等故障ナク使用スルヲ得タリ

第二内火艇機械

極メテ良好態ナリ(昭和七年三月池貝鉄工所製機械ト換装)

風揚機械

風揚機械ハ良態ナルモ使用燃料ハ赤貝印コガソリニテ適當ト認ム

尚風揚機械台ヨリノ疏水抜管ナキタシ不便ニ付機械台ヨリ舷外ニ疏水抜管新設ヲ要ス

工作料

(1) 現裝備ノ足踏旋盤(床長ワ四呎)又鑽樑機械ハ最舊式ノモノニシテ目下使用ニ適セズ本艦ハ老朽艦ニテ各部ノ修理箇所頗ル多ク且ツ常ニ單艦長期間遠々南洋及北海方面ノ洋上ニテテ測量任務ニ従事スルヲ以テ艦内工作ニヨリ外ナリ艦ノ行動並ニ保安上本機械ハ極メテ重要ナリ本艦工作關係設備工作機械トシテハ最少限度ヲ記シテモト是非換装ヲ是非必要ト認ム

左記

機 械 品 名	臺 数	備 考
電動機附旋盤(床長廿六呎)	一台	附屬品一揃附シテ一台旋盤ヲ各種ノ作業アルニ付直径十吋 ニバケルニ三分締一併附着スルヲ要ス
電動機附鑽様機械(盤直径十吋)	一台	鑽先十六分ノ吋ヨリ十六分ノ吋毎ニ吋マデ及ビコーパーパルヲマツル 附ノモノナルヲ要ス
電動機附研磨機械	一台	金剛砥石荒目申月ニ何附ノモノニシテ直径十吋幅二吋ノモノ ナルヲ要ス

位置、現在機械室上部ナルモ同工場ハ極メテ狹隘ニシテ作業困難ナル為後部
 圧搾唧筒室ニ木工場ヲ兼用セシメノ裝備セシムルヲ適當ト認ム
 現在木工場ハ艦首アリテ本艦ハ航海中艦ノ動搖激シキ為作業困難ニ
 シテ常ニ後部又ハ中央ニアリテ作業ヲナシツ、アル現状ニ付両者共
 圧搾唧筒室ニ置クヲ適當ト認ム
 (2) 今次行動中ハ「アセチレン」瓦斯熔接器並移動電動鑽様
 機械ハ極メテ有効ニ使用セリ。

第九 醫務衛生ニ関スル事項

出港前準備トシテ衛生講話總員檢便總員檢痰施行、
結果菌保有者一名ヲ發見セ、唯總員健康診斷ノ結果横
痲一排尿困難者一計二名不合格トシテ横須賀海軍病院ニ送
院セリ然ルニ出港當日ニ至リ横痲二名急性淋毒性尿道炎
一名出テタリ依ツテ將來ヲ考慮シテ此ト等三名ハ其儘乗艦セ
シタリ横痲ハ航海中手術施行經過良好ニシテ約二十五日ヲ要シ
急性淋毒性尿道炎ハ約一月ノ長時日ヲ要シテ共ニ全治セリ
出港翌日ヨリ霧中航海ヲ續クル事約一週間氣候ノ激變ニ伴
ヒテ需診患者頓ニ増加シカフルニ急性淋毒性尿道炎ニ對シテ銳
意加療スルモ意ノ如ク輕快シ来ラズ又出港後十日目ニシテ胸膜炎
患者一名發生セルモ時既ニ航路ヲオホツク海ニ入り海上靜穩ナリ
ニ依リ患者ノ為好都合ニテ穿刺液百CC抽出セシニ熱ハ三十六度

五分一三七度五分ノ間ヲ往來シ經過漸次良好食慾増加便
 通佳良トナリ六月二十三日釧路入港中巡洋艦木曾ノ乗リシ會
 セルヲ以テコレニ便乘依托二十六日横須賀海軍病院ニ送院セリ
 「チフス」豫防接種ハ十四日之ヲ施行セリ異状反應者ナシ六月十六日
 釧路入港傳染病患者一名モナリ衛生狀況極メ良好ナリキ
 第二面行動六月二十三日釧路出港出港時ニ於ケル需診患者ニ平病三
 性病三外傷一出港翌日上顎左第二門齒々槽膿瘍一發生顔面
 浮腫性腫脹ヲ来セルモ切開排膿ニ依リテ直ニ全治セリサレド其
 後漸次齒痛患者ノ増加ヲ見タリ依リテ大溪入港ト同時ニ大溪
 共濟會病院齒科ニ六名ヲ部外依托セリソノ原因ヲ尋ヌルニ突
 然ノ氣候ノ激變ニ會ヒ即チ氣温ノ低下濕氣ノ増加船體動搖長
 航海ニ依ル全身ノ疲勞ノ影響ヲ受ケシコト及霧中航海ニナル為
 唯喰フ事以外何等樂ミナリ常ニ齒牙ヲ過勞セシメヨリタルニ

由ルナリソノ状態ヲ見ルニ横須賀出港時齒科治療受ケ来リシ者三名全然受ケザリシ者五名ナリ今後ハ北洋行動前ニ於テ必ズ齒牙ノ整備ヲ充分勵行セシメ置クヲ要ス七月十二日ニ日間ノ航海ヲ終ヘテ大湊入港薪炭補給十四日出港即日青森着青森衛生状況ハ膈ヲナス患者十六名アリ尚増加ノ傾向アル由テ全市豫防ワクチン注射施行中ナリニ依リ上陸員販艦並糧食搭載時ニ充分ナル注意並ニ消毒ヲ為セリ

第三回行動七月十八日青森出港出港時需診患者乎病一性病ニ外傷ニ東經百六十度越ニル頃ヨリ船体動搖甚シク為ニ扉ニ手指ヲ挟マル者物体落下ニ依リ外傷或ハ「レウマナス」性疼痛ヲ訴フル者等需診患者漸次増加シ来リソノ原因ヲ考フルニ致度ノ長航海ニテ幾分鈍感トナリシ者ハ手ヲ挟マシ敏過ケル者ハ時ニ「レウマナス」性疼痛ヲ訴フルニ至レルナリ今期兵員ノ健

康状態ヲ見ルニ前年ニ於テ極度ニ疲労感アリシモ後年ニ至リテ却ツテ氣候ニ慣レ柔道銃劍術等ノ獎勵ニ依リテ健康状態ヲ盛リ返シ来リ患者モ亦減少セリ八月九日二十三日ノ長航海ヲ終ヘテ新炭糧食補給休養ヲ為シ釧路入港衛生状態ハ前月同様極メテ良好ナリ

第四回行動八月十六日釧路出港出港時需診患者平病ニ性病ニ外傷ニ機關長山下機關大尉數日前ヨリ氣分勝レズ且右胸側痛盜汗アルニ依リ需診右濕性胸膜炎ト診断胸液二百五十ccヲ取ル体温三十六度二分一三十七度五分ノ間ヲ往来ス本期行動ニ再三低氣圧ト遭遇セシヲ以テ船体動搖強ク療養意ヲ如クナラズ依ツテ九月四日大湊入港後同月五日大湊要港部病院ニ入院セリ尚本行動ニ於テハ相撲劍道ニ専心セシメタリ兵員ハ全ク北洋ニ於ケル濕潤ナル氣候ニ慣レ元氣旺盛衛生狀況ハ極メテ良好ニ經過セリ九

月四日三日間、航海ヲ終ヘテ大湫入港九月八日出港即日函館ニ
 入港ス函館衛生状況ハ鵬ヲケフス小流行ノ後ヲウケテ尚三十名ノ
 患者十六名ノ保菌者ヲ有ス依ツテ上陸員並糧食搭載ニ嚴重
 ナル注意並ニ消毒ヲ興ヘタリ

第五回行動九月十三日函館出港出港時需診患者平病ニ外傷
 一ニシテ衛生状況極メテ良好ニ經過シツ、アリシガ二十三日「ロバツカ」沖
 假泊地ヲ出デテヨリ間モナク鰈ノ中毒患者三名ヲ出セリ一名ハ輕ク
 シテ休養スルニ至ラズ一名ハ体温三十七度六分顔面蒼白脈搏八十至
 下痢一日七行嘔吐ニ回下腹部ニ疼痛アリ最後ノ名ハ最モ重ク体
 温三十九度五分顔面紅潮脈搏九十至下痢一日三五行ノ性状ヲ
 見ルニ粘液性血便ニテ下腹部疼痛並ニ圧痛アリ索状物ヲ觸
 レソノ症状赤痢ニ似タリ依ツテ直クニ隔離下劑投其納豆錠ヲ服
 用セシ同時ニ機關科總員ノ健康診断行ヒタルモ續發スルコトナク

患者ハ経過良好ニシテ一週間ニシテ全治セリソノ原因ヲ按ズルニ鯨ノ腐敗ニ依ルモノナリト断定ス今期行動経験ヨリ北洋行動ニ際シテ注意スベキ点ヲ擧ケレバ

1. 性病患者、結核性体質、脚氣既往歴アル者、神経質ナル者
 關節、レウマチス既往歴アル者ハ不適當ナリ

2. 出港前齒科治療ヲ勵行ノ事

3. 北洋ニテハ鳥類魚類多ク容易ニ捕獲シ得ル上ニ霧深クシテ外界ノ眺望不良ノ為ニ乗員ハ喰フ事ヲ唯一ノ樂ミトシ居ル狀況ナルカ故ニ之等ヲ食セシムル場合ハ特令ヲ以テ料理セシムルヲ可トス秘カニ隠レテ不手際ノ料理ヲナシテ食ハントスルガ故ニ往々中毒ノ原因トナルナリ

現員延敷 千名=付	一日平均	合計	九月	八月	七月	六月	月別	昭和九年自六月一日至九月三十日 軍艦駒橋患者月別表											
								現員延敷	受療患者延敷	患者延敷	休業延敷								
	一二九一一	一五七五一	三八六八	三九九九	三九八七	三八九七		四三三〇	五五九	六八二	一三三	一四九	一九四	二一六	二二六	一九四	二一六	四九	八九
								四三三〇	五五九	六八二	一三三	一四九	一九四	二一六	二二六	一九四	二一六	四九	八九
								六二六	〇九七	九七	=	三二	一四	四九	四九	一四	四九	八九	八九
								九九七	一二九	一五七	一六	四三	九	九	九	九	九	九	九

第十 會計給興ニ関スル事項

(1) 給興

出港前ニ於テ六月分經費ヲ受込ニ需品消耗品及直買需品等ハ
 従来一ヶ月使用量ヲ概算シテ五ヶ月分ノ買込ミヲナス

本期行動中所需經費ハ別表ニ於テ之ヲ示ス 給興事務ハ概ネ
 順當ニ経過セルモ九月四日大湊ニ於テ受領スベキ經費隔地拂通知
 遅レタル為受領ニ困難セルハ注意ヲ要ス

(2) 糧食

(1) 補給計劃

貯糧品

搭載月日	搭載量	搭載地	記
五、三	三ヶ月半分	横須賀	三種消耗品ハ横須賀取港マデノ全期分搭載ス
七、一四	一ヶ月半分	大湊	

事

(四) 寄港地於ケル生糧品供給能力其他ニ就テ

		生糧品	
搭載量	搭載場所	搭載量	實際搭載月日
五、三〇	横須賀	十七日分	五、三〇
六、一六	釧路	五日分(碓氷線)	
六、二三	全右	二十日分	六、二三
七、一二	大湫	七日分	七、一二
七、一九	青森	二十日分	七、一七
八、七	釧路	六日分(碓氷線)	
八、一四	全右	二十日分	八、一三
九、四	大湫	七日分	
九、三	函館	二十日分	九、二

今次行動中ニ於ケル寄港地ノ生糧品供給能力ハ一般ニ大ニテ特種ナル品種ノ部ヲ除キテハ物資相當豊富ニテ内地ヨリモ遙カニ良好ナルモノモ二三種見受ケラレ本艦一艦ノ如キハ直チニ補給ヲ受ケ得ルモノト認ム寄港地別ニ述ブレバ尤ノ如シ

(a) 釧路

當市人口約五万北海道南東部ニ於ケル海産物農産物ノ取引地ニテ物産一般ニ豊富ナリ生牛肉、生野菜、生魚肉等ノ如キハ約一〇〇艇ヲ直チニ直買シ得ルモノト認ム但シ六月ニ於ケル人參牛蒡ハ内地産ノモノニテ良好ト云ヒ雜ク單價ノ如キモ相當高價ヲ唱ヘ居レリ商人ハ多少馴レザル点アルモ一般ニ親切丁寧ニテ時間ヲ勵行シ概ネ適良ニ納入セリ

(b) 大湊

上納方法一般ニ良好ナリ

(C) 青森

當市ハ本年三月大災アリシヲ以テ供給能力ニ多少ノ疑ヒラ懷キ供給可能ナルヲ照會ヲ發セシ所供給可能ナル旨ノ回答ニ接セリ

糧品ハ全部上甲板後部ニ於テ消毒ヲ行ヒ格納セリ
 生糧品ハ一般ニ豊富ニテ供給能力モ亦大ナリ 大根 茄子 胡瓜 南瓜 馬鈴薯 玉葱 人参 筴豆 地葱 等ハ新鮮ニテ殊ニ南瓜 如キハ軍需部ニ受ケノモヨリ遙カニ良品ヲ納入セリ 牛蒡ハ一般ニ良好ナラズ 生牛豚肉 鶏卵 等モ品質良好 生魚肉ハ本艦入港當時荒天續キニ為上納困難ナラント思ヒニ要求通リ新鮮ナルモノ納入セリ 當地ノ請負人ハ納入法等不備ノ点ナリ又各請負人協同シ懇切町寧迅速ニ納入シタリ

(d) 函館

當市ハ本年三月大災アリシヲ以テ供給能力ニ多少ノ疑ヒラ懷キ供給可能ナルヲ照會ヲ發セシ所供給可能ナル旨ノ回答ニ接セリ

九月八日函館入港後、調査ニ依ルニ予想以上ニ供給力大ニシテ生牛
 肉如キハ納入前日屠殺シタル新鮮ノモノニシテ殊ニ優良品ナリキ
 其他豚肉鶏卵及生野菜（一部ヲ除キ）モ概ネ良品ニシテ生魚肉ハ
 納入日ノ午前六時請負人ト共ニ魚市場ニ赴キ購入シタリ極メテ新鮮
 ノモノヲ直ニ艦ニ運ビタリ商人ハ懇切丁寧ニシテ時間ヲ勵行シ良品ヲ
 迅速ニ納入セリ

(イ) 物品保管状況

米麦庫

従来米麦庫ハ舷側天井等ニ汗ヲ生ジ貯藏品ヲ損スル虞アリ又
 舵軸附近ニ油漏洩箇所アリシヲ以テ出港前油受ケ及格子板ヲ
 装シ可及的之ガ防止ヲ努メタルモ多濕ノ地ニ長期行動ヲナシ且動搖
 大ナル本艦ニテハ深甚ノ注意ヲ以テスルニ保管状況良好ナリトハ云ヒ
 難シ